

道を求めて生きる

野山に新緑の季節が訪れました。近年、私は猫の額ほどの畑に、ジャガイモやナス・胡瓜・トマトなど、幾種類かの野菜を育てています。

種を蒔き数日後に芽生える姿はとても感動的で、生育していく姿は愛おしくさえ思え、いつしかその場にしゃがみ込んで見入ってしまいます。せっかく大きく育ったものを、少々ためらいながら感謝して収穫するのです。

暑さ寒さに耐えて、雨に打たれ、風に揉まれて生き、やがて花を咲かせて実をつけ老いていく姿。病気になっても懸命に生きて一生を終えていく。こんないのちの営みを見つめるとき、限られた菜園の植物でありながら、いのちの「まこと」を教えてくれているように思われます。

さて、私たち人間は植物や動物と違って、生まれて生き、老いること、病気になること、死ぬということに、悩み苦しみ、迷ったりもします。この結果、心に沸き起こる不安や、不幸に遭いたくないという思いから、この事実からできる限り目をそらせ、豊かさや便利さ、そして面白おかしく過ごすことを追い求めるあまり、かえって大事な「いのち」を見失っていませんか。

人間は生きることに悩み、苦しみ、迷うということがあるからこそ、良き人や本当の教えに出会うこともでき、わが身を振り返り、確かな道を歩み出すことができるのではないのでしょうか。そして、人間に生まれた本当の意義を見出す好機として、仏様の教えを聞く場（仏法聴聞）が開かれているのでありますよう。